

ほんざる4、1974]によってなされている。大分県では現在の本匠村や耶馬溪町など8市町村にその生息が示されている。1920年代のニホンザルの生息に関する情報は大変重要な資料となるが、関係者の手元にあるその情報量についていえば極めて乏しい。

そこで、1923年当時の生息地に該当する市町村について、それぞれ集落単位（地名で小字レベル）で70才以上の男性を対象にアンケート調査した。その目的は1920年前後の年代のニホンザルに関する住民の記憶を情報として収集し残すことにある。今、老人の記憶を書きとどめておかなければ、1920年代当時のニホンザルの生息状況は、推測さえできなくなってしまうからである。この意味では大分県だけでなく全国的な情報収集の必要性を感じる。

我々の行った調査の内容は以下の通りである。

1. 地元であなたが初めてサルの群れを見た年
2. 地元で初めてサルの群れによる被害を受けた年
3. 地元でサルの群れによる被害を頻繁に受け始めた年
4. 初めてサルを見た年、それはどこで見たか
5. 被害を受けた作物

これまでのアンケート調査は大分県の本匠村および耶馬溪町のほぼ全域と、米水津村および弥生町の一部を終えた。

環境因子については生息地周辺の市町村ごとの開設された林道距離、人工造林や森林伐採面積など林業関係の記録を、部分的ではあるが1940年代まで調査できた。さらに環境変化について、航空写真からも、このデータとあわせて生息分布域周辺を年代ごとに解析したい。

計画：2-3

日光における厳冬季のニホンザルの採食量と食物供給量について

小金沢正昭（宇都宮大・農・演習林）

栃木県日光市の低標高域に生息する野生群3群を対象に、スキャンニング法による採食量と植生調査による食物供給量の推定を行った。対象とした群れは、いずれも成獣メスに装着したテレメトリ送信機によって識別され、その行動圏と土地利用を明らかにした。今回用いたスキャンニングは、

15分間隔で行い観察できた採食食物ごとにその回数を記録し、採食量の指標とした。調査は、93年11月から94年3月にかけて24日間実施し、合計451回スキャンニングした。このうち、501回の採食を記録し、記録した食物は101品目（種部位別）であった。上位5品目は、コナラ（堅果）67回（14%）、タケsp（葉）39回（8%）、イネ科草本（葉）37回（8%）、シロツメクサ（葉、茎）34回（7%）、だいこん（農作物）34回（7%）で、全体の42%を占めた。また、上位10品目は全体の60%を占めていた。当地域の低標高域に生息するニホンザルの食性は高標高域の群れと比較すると、きわめて多様であった。しかも、生息環境の違いを反映して高標高域では見られないコナラ（堅果）や農作物が上位を占め、高標高域で優占牧草類（シロツメクサ）は少なく、樹皮、冬芽の採食は少なかった。なお、本研究は、今木洋大（東京農工大学・自然保護）との共同で行った。

計画：2-4

島しょ性を視野に入れた金華山ニホンザルの生態学的育成の研究

伊沢 紘生（宮教大）
遠藤 純二（東浜小）

金華山には野生ニホンザル6群、計250頭ほどが現在生息している。そのうち1群は島の北部に遊動域をもつC群が最近分裂してできた群れである。かつて1群であった金華山の群れがどのような経過を経て5群になったかは、すでに資料を整理し復元を試みているが、今回の分裂の経過を追うことで、島という閉鎖環境の中で生起する群れ分裂のメカニズムに関する貴重なデータを得ることができた。一つの大きな知見は、分裂は個体数の増加とは必ずしも関係していないということである。この分裂に関しては、さらに追跡調査をする予定である。

これまで12年間の、金華山のサルのメスの初産年齢、出産間隔、寿命などに関する資料が、かなりの程度まで整理できた。それらは、同緯度内陸部のサルたちに関する資料との比較検討されている段階だが、おそらく島という閉鎖環境が関係しているものと思われる。初産年齢が7~8才と遅いこと、出産間隔が3年前後と長いこと、一方

で寿命はあまり変わらないのではないかという点
が、次第に明らかになりつつある。今後精度をさ
らに高めるための調査を続行する予定である。

体の大きさについて、外見上からは、金華山の
サルは、同緯度内陸部のサルに比べて明らかに小
さい。しかし、どの位小さいかは、捕獲調査が現
段階では不可能なので調べる手段がなかった。幸
い金華山のサルでは、収集した46頭分の骨格標
本がある。一方内陸のサルでは、猿害によって射
殺され埋められた死体のあることが判明し、今年
度オトナのオス3体を発掘した。今後、7体はな
んとか発掘し、比較調査する予定である。

金華山のサルの生態学的特性に直接的に関係し
ているにちがいないサルの食物という観点からの森
林の生産量についても、シード・トラップ法等を
用いて継続してデータを収集中である。

計画：3-1

ニホンザルのコドモのけんかに見られる社会的
状況と第3者に対する認識

浜井美弥（財団法人日本モンキーセンター）

平成5年7月7日～13日、10月20日～2
8日の2回、地獄谷野猿公苑（長野県）において
フィールド調査を行い、志賀A1群のニホンザル
が餌場にいるときに起こったけんかの音声を録音
し、同時にそのけんかの勝敗、攻撃の程度、特に
コドモが関わった場合は親など周囲の血縁個体の
反応を記録した。実際に身体接触を伴うような攻
撃を受けている間に発している悲鳴と、その後、
周囲にアピールするように派手に鳴きだしている
音声は異なっており、現在、特に後者の音声の長
さや頻度について、その母親の順位や周囲の状況
との関わりを分析している。また、高順位家系の
コドモは、攻撃を受けていないような状況でも悲
鳴のような声をあげることがあり、そのときの音
声は、アピールする音声と威嚇の入り交じったも
のであった。

計画：4-1

社会的ネットワークをもとにした霊長類の社会
構造の種間比較

広谷 浩子（神奈川県立博物館）

霊長類は様々な大きさのグループを持ち、社会

構造多岐に及んでいる。この多様性を簡単な指数
で表し、脳の構造をはじめとする形態の進化や生
態学条件と関連づけて調べることは霊長類社会の
進化を解明するために重要である。本研究は、誰
が誰とつきあうかという社会的ネットワークに着
目して、ネットワークの大きさや密度、形、性別
による参加様式の違い等を定量化し、各種および
各属の社会性を表す指数を得ることを目的とする。
グループ飼育されているさまざまな種を対象にグ
ルーミングのネットワークを記録した。それと共
に文献からのデータもとりあげ分析した。

今回は*Macaca*を中心に観察及びデータ解析を
行った。加えて、それ以外のオナガザル科の種や
新世界ザルについても予備的観察を行った。結果
は以下のとおりである。

1) *Macaca*のデータ解析

グルーミングの行われたdyadの総数や各個体
にとつてのグルーミング相手数の群れ平均をグル
ープサイズに対してプロットした。ボンネットモ
ンキーやチベットモンキーではグループサイズが大
きくなると、これらの値はニホンザルに比べてか
なり急な上昇を示した。ニホンザルとボンネット
モンキー・チベットモンキーとのコントラストは、
グルーミング相手数における性差でも認められた。
ニホンザルでは相手数がオス>メスになっている
のに対し、ボンネットモンキー・チベットモンキ
ーではメス>オスであった。このような傾向が
*Macaca*内の社会変異とどう関連するのか興味深い。

2) *Macaca*以外の種の予備的観察

社会関係の種間比較にとつてグルーミングが必
ずしも適当な行動とは限らない。たとえば、リス
ザルは*Macaca*同様に複雄群をつくるが、観察中
にグルーミングをほとんど行わず、尾を肩にかつ
いで体を接触させてすわることが、重要な親和的
行動のひとつであった。社会性の尺度としてどの
行動を選ぶかは、広範な種間比較をする際に検討
すべき重大な問題であろう。

計画：4-2

動物社会の変異及び定量化に関する研究

広谷 彰（京都大学霊長類研究所）

脳構造の進化にともない個体認知能力が増し、
これが動物の社会性の進化に影響したという仮説
にもとづき、いくつかの種間比較研究がおこなわ